

氏名	加藤 智史
所属	人間健康科学研究科 人間健康科学専攻
学位の種類	博士（看護学）
学位記番号	健博 第 235 号
学位授与の日付	令和 4 年 9 月 30 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題名	終末期にある患者に対する身体接触を用いたかかわりのプロセス
論文審査委員	主査 教授 習田 明裕 委員 教授 山本 美智代 委員 教授 河原 加代子

【論文の内容の要旨】

背景

身体接触を用いたかかわりは看護師の経験知に基づいた患者へ安楽を提供する技術の一つであるとされているが、文脈依存性の高さゆえにその実践について一般化することは困難とされてきた。超高齢社会を迎える本邦の終末期医療において、患者が抱える全人的苦痛に対し、身体接触を用いたかかわりをするものの重要性があると考えられるが、実践者がどのような文脈において、何に気づき、考え、行為し、振り返るのかといったプロセスは明らかになっていない。

目的

本研究の目的は終末期にある患者に対する身体接触を用いたかかわりのプロセスを明らかにすることである。

方法

研究参加者は終末期看護に携わる認定看護師、専門看護師とした。一人につき、2 回のインタビューを実施し、印象に残っている身体接触場面について聴取した。分析には構成主義的グラウンデッド・セオリーを用いた。データから「初期コード」を生成し、意味の近い「初期コード」をまとめ、それらを代表する「焦点化コード」を生成した。データ、「初期コード」、焦点化コード」の比較を繰り返し、類似する「焦点化コード」から「理論的カテゴリー」を生成し、一つのプロセスを構築した。本研究は東京都立大学荒川キャンパス研究倫理委員会の承認（承認番号 20082）を得て行った。

結果

研究参加者は認定看護師 7 名、専門看護師 4 名だった。性別は全員女性だった。年齢は 30 代から 60 代、看護師経験年数は 14 年から 40 年、専門資格経験年数は 4 年から 16 年であった。

本プロセスは、5 つのフェーズと 1 つの倫理的姿勢による 6 つの理論的カテゴリで構成されていた。このプロセスは、担当する患者に関心を持ちかかわり、《苦痛に気づく》ことから始まっていた。次に、看護師は患者の抱えている苦痛を受け止め、責任をもって《苦痛に応じる》ことをしていた。そして、看護師は患者に身体接触を用いたかかわり、もしくは用いないかかわりの双方において、患者の《苦痛を分かち合う》ための実践を作り上げていた。また、看護師の行動の背景には患者主体となるケアを提供しようとする《倫理的対話姿勢》があった。看護師は患者のもとから離れた後に、自身の行為が患者のケアにつながったのかといった中長期的な視点と自身の中の変化に対する 2 つの視点を持ちながら《行為を省察する》ことで、次のかかわりにつなげていた。こうしたかかわりを繰り返すことで、《患者と自己の理解が深化する》プロセスとなっていた。

考察

終末期にある患者とのかかわりにおいて、その患者の《苦痛に気づく》ためには、看護師が患者の苦痛を読み取ろうとする姿勢、注意を払うことおよび、鋭敏な知覚能力が必要であることを示していた。《苦痛に応じる》にあたってはケアする一人の人間としての責任をもって応じる必要性を示していた。また、終末期にある患者の《苦痛を分かち合う》ために、身体接触を用いる場合には、患者をケアしたいという思いを持って触れることの必要性を示していた。身体接触を用いない場合においても、多職種との協働を図り、患者のニーズに応じられるような環境を生成する看護実践の存在を示していた。また、患者の尊厳や意思を尊重した患者主体のケアとなるよう患者を顧慮し、自身に生じた責任を全うする《倫理的対話姿勢》が実践の背景にあることを示していた。そして、《行為を省察する》ために推移を見通し、自身の変化を顧みるという 2 つの視点を持つことの重要性を示していた。

結論

本研究結果は、患者の苦痛に気づき、応じ、分かち合い、省察するというプロセスを提示した。それにより、患者との間に生じた相互作用を伴った変化を包括的、体系的に捉えることを可能にし、より具体的な省察の視点をもたらしたことが経験知を重ねていくことにつながると考えられた。また、患者の世界に入り、ともに在るというケアリング行動の具体的な実践につながることが示唆された。

キーワード：身体接触、タッチング、ケアリング、終末期、グラウンデッド・セオリー